

政策づくりの座標軸

予算委員会 専門員

むらまつ みかど
村松 帝

世界中から 21 世紀は日本の世紀と言われたのは、ついこの間のことである。しかし、今閉塞感と将来への不安感が蔓延し、ある種の諦観が日本を覆っている。その予兆は、繁栄を謳歌していたあのバブルの頃に既に現れていたが、人々に明確に認識されることはなかった。ほころびや歪みが顕在化するようになって採られた対策は後手に回り、対策が打たれた頃には厳しい現実さらには新しい局面を迎え、一步も二歩も前に進んでいた。バブル崩壊後の長期のデフレ経済との戦いは今日なお続いている。

戦後最長の景気回復がもてはやされながら、いくら働いても極貧生活から抜け出せないワーキングプアが増加し、あるいは都市と地方、大企業と中小零細企業、世代間の負担と給付等々の格差が拡大し続けるという矛盾が噴出し、解決の目途は立っていない。

これまでの社会構造を根底から覆すほどの変化が起きている中で、私たちはその変化の意味をどう受け止め、どのような課題に着目し対応していったらいいのか。数え上げたら切りがない課題の中から幾つか挙げるとすれば、次の四つの座標軸を外すわけにはいかない。一つ目は人口減少社会の進行である。二つ目は天文学的数字に膨れあがった債務残高である。そして、三つ目は不可逆なグローバル化、四つ目は地球環境問題である。

明治の初め 3,400 万人程度であった我が国人口は、僅か一世紀余りの間に 3.5 倍に増え、世界第二位と言われる経済大国の原動力となった。しかし、昨今の出生数の減少が続けば今世紀末に人口は半減すると予測されている。多少の出生数の回復があったとしても人口の減少は不可避であり、社会保障システム等々への破壊力はすさまじいものと想像される。また、巨額な債務残高は豊かで便利な生活を限度なしに追求してきた結果である。その帳尻が財政の負担と給付のアンバランスでこれ以上放置できない状況になっている。幸運と言うべきか、いまのところその弊害は顕在化していない。いや、顕在化してからでは遅い。今のうちに、あるべき姿に近づけておくことが必要である。

農耕・定住生活、大航海時代以来の大変革と言われるグローバル化は、主要先進国の実物経済を終焉させ、その地位を B R I C s 等新興国に譲り渡した。米国や英国は既にその軸足を金融経済に移している。物づくりはむろん大切であるが、それだけで我が国は世界に伍していけるだろうか。地球環境問題は、地球上の生きとし生けるもの全てに共通した命の問題である。

私たちは現在の豊かで便利な生活を守ろうとする余り、改革不可欠の厳しい現実から目を反らしてはいけない。私たちがこの先も対処療法だけで乗り切ろうとすれば、矛盾の蓄積は極限に達し、その付けは将来世代にしわ寄せされる。政治の小さな枠を超え、四点の課題を政策づくりの座標軸の上にとしっかりと据えて新しい社会の姿をともに描き、揺るぎない基盤が構築されていくことを期待したい。国民の覚悟もまた試されようとしている。

立法補佐の立場にある我々も、四つの座標軸を基盤に様々な変化を各自の構想に取り入れることで、いつでも使えるよう磨いておくことが一段と大切になってくる。